



キャスト＆スタッフジャンバー

脚本 - 丸茂湛祥^{たんしょう}さん、演出・振付 - 三浦克也さん。
そのほかの出演者約100人、スタッフ約100人は
すべて市民から一般公募した、市民創作ミュージカル。

公演は海組と空組に分かれて行われました。

舞台は初めてという人も多く
1年間という長く厳しい練習、準備を経て
みんなの手でつくりあげた舞台。

11月1日・3日、ホールじゅうに感動が広がりました。

の山袖

衣装づくりもすべて市民ボランティアの手で



踊りと声がひときわ目立った富士まつり



曾我まつりに参加。
曾我物語ゆかりの地をパレード





平成9年8月25日 企画発表



緊張のオーディション



配役選考を兼ねた課題練習発表会

ロゼシアター開館5周年記念事業 市民創作ミュージカル

新・曾我物語

名残り

鳥は飛ぶ その羽は強く風を切る
鳥は翔る その瞳ひとみは西の空を見つめる
なぜそんなに燃えるのか
なぜそんなに赤く染まるのか
たとえ夢が激しく震えていても
たとえ運命が悲しく心を閉ざしても
山の向こうには何かが待っているから

テーマソング「鳥は翔る」より

本番直前。さあ、1年間のすべてを舞台へ



練習するみんなを鈴木市長が激励

上演日 平成10年11月1日

びっくり箱コンサートにゲスト出演





新・曾我物語 名残りの小袖

演劇は「娯楽」。

その娯楽が続いて「文化」になる

演出・振付
三浦 克也さん（演出家）

一つ一つを演出家の言う通りに動くのではなく、その役、その場面、そのせりふを自分たちで考えながらやつてみようという姿勢で取り組みました。百回やつて百回とも同じ芝居なんであり得ない。違う芝居で当然なんです。それがまた新しい発見と感動を生むのです。

この話をいただいたとき、ミュージカルに曾我物語？ 和もの？ あだ討ち？ 正直言つて、これはダメだ、やつても成功しないだろうなと思いました。でも作曲はジャズ系の方を起用するというので、これはおもしろい。時代劇とジャズの新しい「和ものミュージカル」をつくれるかもしれない、と思つたんです。

また、一年間という長い期間の取り組み、しかも出演者が素人ばかりで大変ではとよく聞かれますが、少しも大変だと感じたことはありません。好きなことに打ち込むときは楽しく充実しているものです。確かにオーディションを終えたばかりのころは、出演者の多くが歌としゃべりはまずまずでも踊りがダメでした。

ですから一年間の前半を体を動かす基礎訓練に当てました。決して易しいとは言えない練習に、きっとやめていく人が多いだろうと思つていましたが、ほとんどの人気がやめず練習も休まないんですよ。驚きましたね。踊りも目に見えてうまくなつていきました。

それにこのミュージカルは細かい動作

演劇は「娯楽」です。その娯楽が続いて初めて「文化」になります。富士市にはせつからこんなにいい施設があるのでから、このミュージカルだけに終わってほしくありませんね。これをきっかけにここで生まれた市民劇団のようなものができますね。またこれからは、出演者同士だけではなく、出演者と観客のふれあいですね。またこれからは、出演者同士ができる交流の場になつてほしいと思います。さらに市民劇団の交流を通して、富士市だけでなく日本全国、そして世界中の人々の交流の場、情報の発信基地になつてほしいですね。

この舞台の感動は 裏方さんたちのおかげですね

私は主にストレッチと子供たちの指導を担当していました。最初は、ダンスは初めてという子がほとんどで大変でしたが、八月くらいからぐーんと真剣になってきて意気込みが感じられるようになりました。ときには厳しく注意したこともありましたが、今では子供たちにすっかり情が移ってしまい、舞台上で一生懸命やっている姿を見たら胸が熱くなつて涙が出てきましたね。

また、私は裏方の仕事をしていました。夜遅くまで衣装に色づけしたり、着物と帯の組み合わせを考えたり、次の場の出演者を舞台へ送り出したりと大忙し。一般公募で手伝ってくれた人たちもつと大変だったと思います。衣装はみんなの家にあつた着物を縫い直したものがほとんどで、おばあちゃんまで連れてきて縫っている人もいました。こうした裏方さんたちのおかげで、この舞台の感動があるんですね。



製作スタッフ・振付担当
細木 マリさん
(ジャズダンス講師)

感動・笑顔・涙…



子供たちの笑顔が 何よりの励みに

大役をいただいて、とにかく難しかつた、の一言です。踊りもとても大変でした。でも好きでやつてることですから、苦労とは思いませんでしたね。周囲の支えがあつてここまでやつてこられました。特に、子供たちの屈託のない笑顔が私にとつて何よりの励みになりましたね。本当に楽しかったです。



杉山 直希さん
(横割本町)
曾我十郎、**箱王**

曾我物語ゆかりの地に住んでいるので親しみはありました。全くの未経験の上に子供も小さく、最初は一年続ける自信がありませんでした。それがこうして舞台に立てたのは、家族と出演者の皆さんのが支えてくれたから。

何の取り柄もない私でもこんなに大きなチャンスをいただき、感謝しています。

望月 典子

(厚原)

満江御前、庵主

家族と出演者が 私を支えてくれた



佐野 恭史

(田子浦中一年)

君

好次、清蔵

部活もやりながら 頑張った

ミュージカルは初めて。しかもみんなよりも少しおくれて参加したので、最初は踊りが難しかつたです。部活もあつたから少し大変だつたけど、すごく楽しかつたから両方とも頑張りました。ここででききたたくさんの方達と一緒に遊んだり、歌つたり、踊つたり、それがもう終わっちゃうのかと思うと何だか寂しいです。

とても緊張したけれど、客席から拍手をもらつたときは、本当にうれしかつた

です。一年間厳しい練習が続きましたが、毎日が楽しかつたです。年齢や学校を越えた友達ができましたし、自分の役も好きで

会には、ぜひ参加してみたいですね。

嶋 珠希

(吉原小六年)

景太、箱王

皆さん的情熱がホールじゅうに響き渡つた二日間。

公演が終わると客席から惜しみない拍手が送られました。まるで鳥が羽ばたいていく音のようで、まさにテーマソングのとおり、感動という名の「鳥が翔(かね)た」瞬間でした。そのとき多くの出演者、スタッフの瞳は、これまでの努力と達成感、そしてこの舞台の感動をたたえた涙で輝いていました。

こうして市民創作ミュージカル「名残りの小袖」は幕を閉じました。しかし、それは富士市の舞台芸術の一端を市民が担うという新しい文化創造の幕を開けを、はつきりと告げた瞬間でもありました。

